

東洋紡株式会社 2024 年度 第 2 四半期決算説明会 質疑応答要旨

日時：2024 年 11 月 8 日（金） 9:00～9:50

場所：WEB 形式

説明者：代表取締役 社長 竹内郁夫

本資料中の将来の業績見通し等に関する記述は、現時点における情報に基づいており、当社として保証するものではありません。実際の業績等は、さまざまな要因により異なる可能性があります。

Q：上期の増減分析で、「売値」効果が大きいものの、包装用フィルムの収益性は改善していない。包装用フィルムの価格転嫁は十分でなかったのか？下期に交易条件は改善するのか？また、環境配慮型フィルムにかかるコストに対して付加価値を取っていただけるのか？

A：上期は価格交渉中の部分があり、売値効果が十分に実現できなかった。下期はフルに寄与するので、収益性は改善する見通し。また、環境配慮型フィルムについては、汎用品とは別の価格設定をしているが、まだ十分にユーザーの理解が得られていない状況であり、今後改善していくべきと認識している。

Q：“コスモシャイン SRF（以下、SRF）”、セラミックコンデンサ用離型フィルム（以下、MLCC）の上期の状況は？

A：前年同期比で、SRF は横ばい、MLCC は約 10%増収（売上高ベース）。

Q：MLCC における用途によるバラツキの具体的な内容は？

A：スマホなどに使用されるハイエンドの数量が上期は伸びなかった。一方、AI サーバー用途など、ハイエンド以外の出荷が好調だった。

Q：フィルムの、下期売上高が対上期 44 億円増に対し、営業利益が 5 億円増に留まる理由は？

A：包装用フィルムは収益性が改善するが、工業用フィルムで 25 年春に商業生産開始予定の MLCC 新設備の立上げ費用を予定しているため。

Q：環境・機能材の下期の営業利益は、上期に対し 13 億円の改善だが、その根拠は？

A：パイロン・ハードレンの中国向け電子材料用途が回復している。加えて、不織布マテリアルは、構造改革を進めており、収益性改善効果を織り込んでいる。VOC 回収装置は、EV 化減速影響もあり、減益となるが、全体として利益改善ができると見ている。

Q：東洋紡エムシー(株)における三菱商事(株)との協業の状況は？

A：着実に新しい接点や案件が増えている。例えば、環境関連では、東洋紡だけではできなかった接点から、BC膜のリチウム濃縮回収装置の案件が決まった。自動車関連では、新組織のモビリティ事業推進ユニットが自動車 OEM に直接提案している。具体的には、カーシートのリサイクルの観点で、“プレスエア―”のウレタン代替の検討を進めている。また、三菱商事(株)のネットワークで日系の OEM だけでなく、欧米の OEM との接点も生まれてきている。

Q：エアバッグ用基布の収益の状況、タイの原糸工場の状況は？また、黒字化はいつ達成するのか？

A：上期で収益性は大きく改善したが、依然赤字は残っている。タイの工場は、原糸の認証取得が一部始まった。今後稼働を上げていくことで収益性の改善を図る。黒字化は 26 年度になる見通し。

Q：24 年 9 月末の資産が大きく減っていない。足元の D/E レシオからすると、成長投資を加速させるのは難しいのではないかと？また、今後どのように資産圧縮を進めていくのか？

A：成長投資については、直近 3 年間でほぼ意思決定を完了している。当面大きな投資は予定していないため、設備投資は今後ピークアウトしていくと見ている。資産の圧縮については、棚卸資産の圧縮、有形固定資産の統廃合を進めていく。

以上